

岩手山の火山活動について

- ・11月12日20時54分から約4分間、振幅の大きな火山性微動が発生した（平成10年7月10日以来）。
- ・波形記録を見ると1分程度毎に数回の地震（大きな振幅）と火山性微動（小さな振幅）が混在している。
- ・震源は西岩手の深さ2～3km（もっと浅い可能性もある）付近。
- ・微動発生と同時に歪計（玄武洞）が4分間連続して変化。この規模（M1,2クラス）の地震だけではこのような変化は生じないとみられるので、地中での断層運動と流体の移動があったと思われる。
- ・変化があった歪計は1点だけなのでモデルは難しい。
- ・GPS観測ではこの微動に伴う変化はない。
- ・表面現象は、11月12日の夜は降雨、雲のため詳細は不明。13日の早朝（05時頃）、今までにない多量の噴気が見られたが、その後09時過ぎのヘリコプターからの観測では噴気は多くなかった。10月以降、西岩手での噴気の頻度、量、範囲は増加の傾向であった。表面活動が活発化している中で微動が起こったことが昨年との微動と違う点である。
- ・噴気温度は12日の微動後および16日に噴気温度が上昇しているが、今までの変動の範囲。微動発生前に降雨があり、一時的に温度が下がっていたのが回復したともみられる。
- ・微動、地震活動と地表の現象との関係を特定できないことおよび昨年7月と同程度の今回の微動発生後に表面現象が特に見られなかったことから、「水蒸気爆発の可能性のある状態が継続」とする。

火山噴火予知連絡会第2回活火山ワーキンググループ 議事録

日 時：平成12年2月4日（金）10時～12時

場 所：気象庁第1会議室

出席者：委 員：井田、宇井、岡田（弘）、浜口、藤井（敏）、渡辺、鍵山、藤井（直）、須藤（靖）、岡山、須藤（茂）、植田、森、小宮
オブザーバー：中辻（国土庁）、中禮、藤原（気象研）、山岸（札幌管区気象台）、前田、大西（仙台管区気象台）、
宮下（東京管区気象台）、井口（福岡管区気象台）
事務局：三上、佐久間、佐藤、西脇

1. 活火山候補のリストについて

<資料説明>

事務局が準備した活火山候補のリストについて、内容の説明があり、最新噴火年代の精度、採用された噴火規模の火山毎のばらつき等、今後、議論を進める上でのデータの取り扱いについて議論した。

- ・噴火年代が解るものは機械的に載せたので、小さな水蒸気爆発まで載っている火山もあるし、載っていない火山もあり得る。
- ・従って、個々の火山について、噴火記録を採用するか否かを検討せざるを得ない。

<事例検討>

今後の作業スケジュールの検討も目的として活火山候補のリストから幾つかの特定の火山を取り上げて議論した。取り上げた事例と議論の概要は次のとおり。

1) 鍋島岳・池田カルデラ

・噴火年代

鍋島岳が4300yBP、池田カルデラが5500～5700yBPで問題なし。

・鍋島岳と池田カルデラを一括するか

開聞岳、鰻池、山川港、成川盆地も含めて議論され、位置関係とマグマ組成から開聞岳は、別火山とする。その他は一括する案が出された。

・名称

名称は、地元の認識に合わせれば、防災情報に使い良い。マグマ組成で分類する方法は薦められないとの意見が出た。

2) 羊蹄山

1万年火山に採用することに、問題がないと思われる例として羊蹄山が挙げられた。

3) 濁川

1万年の問題にかけりそうな例として濁川が挙げられ次の議論がなされた。

- ・1万年に拘泥すると噴火年代が1万年を超えるカルデラ火山である濁川は除外され、形成過程等濁川と類似しているものの1万年を切る肘折は採用される。
- ・1万年は、噴火の不意打ちを避けるために設けた基準で、これに拘泥することは本来の目的に照らして馬鹿げている。
- ・危険性があるからと範囲を広げていくと社会的信用を失う。厳密に1万年に拘泥することはないが、例えば3万年は、精度の問題とは言えないだろう。
- ・当面の重要度は低いものの記憶にとどめておきたい大規模な火砕流噴火などは、附則にリストアップしておくなどの手段がある。

<海底火山の選定について>

海底火山の選定について次の議論がなされた。

- ・海底火山に対する防災上の観点や選定基準は、陸上の火山とは異なる。
- ・火口の水深が深いものは、海面に噴火の影響が出ないだろう。しかし、その水深は、明確ではない。
- ・海上保安庁は、この点の考え方を次回に提案したい。

2. その他

1) 小委員会(仮称)設置

活火山WGの会合のみで膨大な資料の検討と活火山の選定を短時間で完了させることは困難なので、地質情報の専門家からなる小人数の会を設置し、集中的に原案の作成を行いたいとの提案があり、趣旨は、了承された。

2) 現在の活火山との一体性

- ・これまでになされた活火山選定の論点で現在の活火山を検討し、追加される火山との一体性を保つ必要がある。
- ・百数十山の均質な比較表を作ることは、容易ではないが、必要性はある。

火山噴火予知連絡会幹事会 議事録

日 時：平成12年2月4日(金)12時~13時

場 所：気象庁第2会議室

出席者：幹 事：井田、岡田(弘)、浜口、藤井(敏)、渡辺、藤井(直)、岡山、早川(代理：文部省)、小宮

事務局：三上、佐久間

1. 事務局からの報告

1) 委員の出欠、臨時委員、オブザーバー等の紹介。

2) 岩手山についての拡大幹事会(11年11月16日)について

- ・11年11月12日に振幅の大きな微動が発生したことから、16日に盛岡地方気象台で臨時の拡大幹事会を開催した。検討結果は見解としてとりまとめ発表した。

3) 「火山活動度のレベル化に伴う防災対応のガイドライン作成に関する調査」の経過について

- ・この調査に関して、学識経験者数人と地方自治体として東京都と鹿児島市及び共同で調査を行っている国土庁と自治省消防庁と気象庁で構成する委員会を1月19日に開催。5段階のレベル化を考えているが、レベル4の上に更に大規模災害についてレベルを設けるべきではないかという議論があった。それを踏まえて防災対応ガイドライン試案というものを作成中。3月上旬頃の次の委員会で提示し検討する。

4) 噴火予知連絡会会報の原稿提出要領の改正について

- ・現在既にご協力をいただいている原稿作成の方法を追認するための改正。改正点は次の3点。ワープロ作成でよい。標題、報告者名は英文併記。提出先、提出方法は現在既に行われている方法による。

2. 三宅島の観測体制について(気象庁)

補正予算で三宅島の観測強化の予算が確保され、観測体制の強化を作業中。地震計と空振計とGPSと傾斜計を1か所ごとにセットで3点整備する計画。既設の地震計A点と合わせて観測網を構成する。その他関係機関の方々にご協力いただき、オンラインでデータを収集し気象庁で24時間体制で監視する方向で相談中。これらの機関とはデータを共有化し必要なものは相互交換する体制を構築してゆきたい。

3. IAVCEIのデータベースについて

このことについて、以下のとおり報告・提案があった。

- ・IAVCEI2000年の国際火山会議が、インドネシアのバリ島で開催される。会議の直後に、火山機器観測データベース作成の国際共同計画のワークショップが予定されており、内容について下準備をしたいとのメッセージが届いている。日本は大量にデータを蓄積しているので、日本の貢献が非常に重要。日本だけでなく、世界の火山の先進国としての国際貢献の観点できちんと対応してくれる人の推薦を求められている。
- ・国際的にどういう動きをするか見ながらやるということと、なるべくバリの会議のワークショップに参加して、その結果をフィードバックした上で、どのように対応していくのかというプランニングをして行く必要があるのではないか。
- ・気象庁および大学棟関係機関を含め、かなりのメンバーを集めないと実現しない。
- ・火山噴火予知連絡会としても前向きに取り組んで行くことにしたい。

4. 岩手山の統一見解と全国の火山活動評価について

事務局から今回の統一見解案および全国の火山活動の評価案の作成に当たっての考え方について説明を行った。また、統一見解を発表するとき臨時火山情報で発表することについて、若干議論があった(統一見解発表時の臨時火山情報と本来の臨時火山情報は重みが違うのか、また、活動が横這い状態および低下、終息時は臨時火山情報でよいのか等)。